

# アーシュラ・K・ル＝グウィン〈アースシー〉 “第二の三部作”におけるジェンダー・ポリティクス ——ポストフェミニズム、クィア理論、反グローバル資本主義

青木耕平  
(一橋大学大学院)

本稿は、第二波フェミニズムの達成を受けアーシュラ・K・ル＝グウィンが1990年以降に新たに著した〈アースシー（ゲド戦記）〉“第二の三部作”におけるジェンダー・ポリティクスを考察する。多くの先行研究は第4巻『テハヌー』をフェミニズムの達成であると論じるが、現在から眺め直したときすでにポストフェミニズムの問題が色濃く反映されている。ここで一度ル＝グウィンはシリーズ終結を宣言するが、同時期の合衆国ではジュディス・バトラーによってクィア理論が隆盛し、ナンシー・フレイザーがそれを「再分配を忘れた承認の政治」と批判するなどジェンダー・ポリティクスが揺れた時代でもあった。ル＝グウィンはこの論争に答えるかのように〈アースシー〉の続編『アースシーの物語』『もう一つの風』を2001年に刊行、作品内にクィア理論とグローバル資本主義批判を取り入れてみせるが、それは同時に新自由主義の外部を描くラディカルな想像力であった。

## キーワード

アーシュラ・K・ル＝グウィン、ゲド戦記、ポストフェミニズム、クィア理論、新自由主義

## I. はじめに——2つの三部作を持つファンタジー

アーシュラ・K・ル＝グウィン (Ursula K. Le Guin) による全6巻からなるファンタジーシリーズ〈アースシー〉(Earthsea)の第4巻『テハヌー』(Tehanu)には、1990年の刊行当時、「アースシー最後の書 (The Last Book of Earthsea)」という副題が付されていた。2001年、第5巻『アースシーの物

語』(Tales from Earthsea)そして最終第6巻『もう一つの風』(The Other Wind)が突如として刊行された時、ル＝グウィンは自らの言明を覆してまでアースシーの世界を更新した理由を、『アースシーの物語』序文にこう記している。

『テハヌー』の結末部で、物語は私がああ、現在 (*now*) だ、と感じる地点に達していた。だが、いわゆる現実の世界の現在と同じで、次はどうなるのか、私にはわからなかった。テハヌーの物語を続けることが出来ず (なぜならそれはまだ起こっていなかったからだ)、私は愚かにも物語はゲドとテナーが、二人は幸せに暮らしましたとさ (*happily-ever-after*)、という地点に達したと思い込み、「アースシー最後の書」という副題をその本に付けた。ああ、なんて愚かな作家なのだろう！現在 (*now*) は動くのだ。(Le Guin 2018: 557 斜体原文)

『テハヌー』の結末部、太古の竜カレシンの娘であることが判明した少女テハヌーは、親である竜カレシンに対して、<もう一つの風 (The Other Wind)>に乗って、他の竜がいる場所へ行こうと呼びかける。しかしカレシンが、人間であるゲドとテナーと一緒に連れて行けないと告げると、テハヌーは人間世界に留まることを選択した。しかし、それから11年後に刊行された『もう一つの風』の結末で、テハヌーは<もう一つの風>に乗り、ゲドとテナーを置いて竜の世界へと羽ばたいていった。この物語の変更は何を意味するのか。なぜテハヌーは、第4巻の選択を翻したのか。最終巻のタイトルともなっている<もう一つの風>とは何か。果たして本当に、作者に

その結末を書き直させるに至ったほど<現在 (*now*)>は劇的に動いたのか——本稿はこれらの問いを明らかにすることを目的として書かれた。本稿で中心的に扱う最後の2巻は、第4巻までの世界観を壊すことによって成り立っているのも、まずはシリーズ全体の構成から話を始めたい。

<アースシー>は、日本では<ゲド戦記>という名で広く知られている。アースシーとは舞台となるファンタジー世界の名であり、ゲドとは第1巻の主人公である男性魔法使いの名であるが、第4巻以降、ゲドは中心人物の座から降りる。2018年1月にル＝グウィンが逝去し、後年書かれた関連作品が全て出版された2019年時点からシリーズ全体を俯瞰するとき、<ゲド戦記>は、原題にはない男性中心主義のイメージを前もって読者に付与してしまう不必要にジェンダー化された訳題というばかりではなく、物語全体の理解としても不正確な名付けのように思える<sup>1</sup>。しかし、この誤った名付けこそが<アースシー>のシリーズ構成としての特異性を示している。最初の3冊と次の3冊との間には、刊行年に大きな隔たりがあるばかりでなく、内容の上でも多大な違いがあることをル＝グウィンは自認し、著者本人が“第一の三部作”“第二の三部作”と区分してこれと呼ぶほどである(Le Guin 2019: 191)。“第二の三部作”で展開されるジェンダー戦略の革新性は、“第一の三部作”の刷新という形で現れるので、まずはシリーズ全体を概観したい。

1 ル＝グウィン逝去から9ヶ月後の2018年10月、<アースシー>全作品そしてル＝グウィンによる新たな書き下ろしエッセイを収めた決定版合本 *The Books of Earthsea: The Complete Illustrated Edition* が刊行された。本稿における<アースシー>の引用は全て同書に拠る。

第1巻『アースシーの魔法使い』(*The Wizard of Earthsea*)が1968年、第2巻『アチュアンの墓所』(*The Tombs of Atuan*)が1971年、第3巻『最果ての岸』(*The Farthest Shore*)が1972年と、4年の間に最初の3作は連続して刊行された<sup>2</sup>。物語の中心にいるのは魔法使いゲドであり、第1巻では未熟な若者である彼が修練を積み試練をくぐり抜け一人前の魔法使いとして成長する様が描かれ、第2巻においてゲドは大魔法使いとして登場し、世界を統一するための腕輪を墓所から奪還、第3巻において老成した大賢人として世界の危機を救ったゲドは、持てる力全てを消尽し、魔法使いとしての使命を全て果たしたとして、物語の結部で竜に乗って飛び去っていった——ここまでが“第一の三部作”である。

“第一の三部作”は人種・エスニシティの面ですでに革新的であった。1968年時点で主人公ゲドの肌の色を褐色——ネイティヴ・アメリカンがモデルである——に設定したことはファンタジーの定石を打ち破るものであり、アースシー世界は「多島海」に象徴されるように様々な人種・民族が共生し、いわば後の多文化主義を先取するような設定を持っていた。ゆえに、“第二の三部作”の革新性は、主にジェンダー面で現れる。

第3巻の刊行から18年後の1990年、第4巻『テハヌー』が出版されると、予期しなかった続編の登場と、それまでの主人公だったゲドの役割の変化に大きな反響が寄せられた。現実世界では18年経っている

が、物語の時間軸は第3巻と同一であり、端的に言えば『テハヌー』は、アメリカ社会で達成されたフェミニズムによって“第一の三部作”を書き直さんとする完結編であった。しかし、『テハヌー』刊行から8年後、アースシー世界でも同様に8年後を舞台とした短編「ドラゴンフライ」が登場して既存の世界観をラディカルに壊すと、最終第6巻『もう一つの風』は『テハヌー』での結末を大きく改訂した。

1990年刊行の『テハヌー』と2001年刊行の『もう一つの風』の間にあるもの、それは——あまりにも自明であるが——1990年代であり、その10年間である。1990年代、長きに渡った冷戦体制が崩壊すると、米国ではニュー・デモクラットが政権の座につきニュー・エコノミーを推し進めるなどグローバル資本主義が進展し、世界各地で新世界秩序(New World Order)が叫ばれ、<現在(now)>は間違いなく、激しく動いた。第5巻である短編集『アースシーの物語』とりわけ「ドラゴンフライ」(“Dragonfly”)と第6巻『もう一つの風』には、1990年から2001年にいたる現実の世界の変化が様々な痕跡として刻み込まれている。その最も大きな変化の一つに、ジェンダーを巡るものがある。1990年に始まり1990年代の米国におけるジェンダー・スタディーズ/ジェンダー・ポリティクスを大きく動かしたものの、それはクィア理論である。

本稿はまず『テハヌー』におけるフェミニズム的転回とそれに加えられた先行研究

2 <アースシー>が<ゲド戦記>と訳されたのと同様に、邦訳版の各巻タイトルは原書と異なったものとなっている。本稿では<アースシー>の本文・タイトルともに直訳のまま使用する。

を整理した後、すでにして小説にポストフェミニズムの問題が書き込まれていたことを新たに論証する。次いで、1990年以降のティア・スタディーズの中心人物であったジュディス・バトラー (Judith Butler) の理論に着目し「ドラゴンフライ」を読み直す。そしてバトラーに対して寄せられたナンシー・フレイザー (Nancy Fraser) の批判とそれに対するバトラーの再反論のその論戦内容を再検討した後、『もう一つの風』で展開されるジェンダー・ポリティクスを読み解く。本稿が最終的に目指すのは、ル＝グウィンのフェミニズムの、真のラディカルさを記述することである。

## II. 『テハヌー』、テナー、(ポスト)フェミニズム

『テハヌー』出版に先立つ1988年、ル＝グウィンは「男性を中心とした小説を書かなくてもよいのだ」という自信を初めて持ったのは1970年代半ばであり、それを与えてくれたのがフェミニズムだと語った (Le Guin 1989b: 237-8)。そのようにして『テハヌー』は、偉大なる魔法使いゲドを中心としたヒロイック・ファンタジーとして著された“第一の三部作”をフェミニズムによって改訂する書となった。英雄ゲドの没落を受け入れられない保守層から攻撃されはしたが、概ねそれは同時代的にもフェミニズム文学の傑作として評価された (Trites 1997; McLean 1997)。本章では2019年の現在から、その評価を再検討したい。繰り返しになるが、『テハヌー』は、2001年にそれ自体改訂されることとなるテキストなのだから。

『テハヌー』で中心となる人物は、テナーである。第2巻『アチュアンの墓所』で、テナーは、まだ幼い時に強制的に連行され、闇を祀る神殿を統べる巫女となるべく幽閉され育てられていたところを、ゲドにより救い出された。解放後、ゲドは自らの師匠である魔法使いオギオンのいるゴント島へとテナーを送り届けたところで『墓所』は幕となる。第3巻で一切触れられなかったテナーのその後が『テハヌー』で明かされる。オギオンはテナーをゲド同様に弟子として扱い、魔法や学問を教えたが、テナーは自らの意思で彼の元を去った——「本が一体私の何の役に立った？ 私は生きなかった、私は男が欲しかった、私は自分の子供が欲しかった、私は自分の人生が欲しかった」 (Le Guin 2018: 430)。彼女は結婚し、農婦として働き、息子たちを育て、「まるで召使いのように」夫に仕えたが、物語の語りの時点で、夫は死別し、成人した息子たちは家を出たきり戻らず、一人で生きている。物語冒頭、虐待された少女テハヌーの保護を始めたテナーの前に、『最果ての岸』で力を使い果たしたゲドを背中に乗せたカレンシが舞い降りる。消耗しきり意識のないゲドを、テナーは保護する。

私はかつてこの男を殺そうとしたのだ、そう彼女は考えた。今は、出来ることならこの男を生かしたい。彼女は挑むように彼を見た、一切の哀れみはそこになかった。

「あの迷宮では、一体どちらがどちらを救ったんだっけ、ゲド？」 (Le Guin 2018: 436)

上記引用部でテナーが想起しているように、『墓所』の結末部、ゲドはただ自分を外の世界へと救い出ただけであって、今後の人生を共に側で支えて生きてくれはしないのだと悟ると、テナーはナイフを握り、彼を刺し殺そうか逡巡する。テナーは、自らの意志で暗闇の巫女となることを望んだのではなかったように、そこから解放されることもまた、自ら望んだわけではなかった。

エイミー・M・クラーク (Amy M. Clark) は『アーシュラ・K・ル＝グウィン』のポストフェミニズムへの旅路』(Ursula K. Le Guin's Journey to Post-Feminism, 2010 邦文タイトルは筆者による) において、テナーこそが<アースシー>全作品を通して最も移り変わるキャラクターであると指摘している。クラークは“ポストフェミニズム”という用語に厳密な定義を与えず、フェミニズムの変遷とテナーの変化を重ね合わせて論じる。事実として、ポストフェミニズムは語義的に「フェミニズムの後」という意味しかもたず、時代により意味するものが異なり、たとえば1990年代においては、「フェミニズムはもう不要」という意味でのみ使われていた(菊地 2019: 71)。第二波フェミニズムによる女性解放運動の高まりの時期に<解放>されるも、男女平等に与えられた権利を使わずに、自ら旧来の<女の人生>を選び取るテハヌーの身振りは、このような意味で90年代的なポストフェミニストと指摘することは可能だ。しかし、このテナーの選択の裏にはより複雑なものがあつたことが物語中盤に明かされる。ゲドは回復すると、テナーがオギオンの元から

去り魔法と知識を捨て去ったことに「落胆 (disappointed)」し、「怒って (angry)」いることを告げる。すると、テナーはこう反論する。

「[オギオンが彼女に伝えた、知識、技、魔法、文字等は] 全て私にとっては死んでいるも同然だった。よその誰かの言語だった。私は以前考えた、私も剣や槍や羽飾りで闘士のように着飾ることができるかも知れない、でもそれは私に合うはずもないだろう、と。剣が私にとって何になる？それが私を英雄 (hero) にするとでも？私に合わないものを身に着けても、歩くのさえ難くなるだけ (中略) だから私はそれらを全て脱ぎ捨てた」(Le Guin 2018: 454)

河野真太郎は『闘う姫、働く少女』のなかで、用語の変遷過程に触れながら、“ポストフェミニズム”を「主義・主張」ではなく「状況」を表すものであるとし、「ポストフェミニズム状況とは、まずは第二波フェミニズムの成果である (中略) これらが本当の意味で実現されたとはいえないものの、そういった権利は実現されたことにされた状況、それがポストフェミニズム」(河野 2016: 24 傍点原文) と定義した。このような意味で、『テハヌー』のテナーはすでに、今日的なポストフェミニズム状況を先取りし、その構造的問題点をわからないゲドに教え諭してさえいる。第4巻のテナーは、男に頼らず働く自立した女性であり、テルーを匿う母親であり、ゲドと愛し合う恋人でもある。ル＝グウィンは『テハ

ヌー』刊行前にこう述べている。

人々は、私がスーパーウーマン症候群 (Superwoman Syndrome) を奨励していると指摘する。違う、私はそんなこと言っていない。私たちは全員がスーパーウーマンになることを求められている; 私が求めているのではない、社会がそうなることを求めているのだ。(Le Guin 1989b: 256)

上記エッセイの初出が1988年であることを鑑みるに、引用中の「スーパーウーマン症候群」とは、1984年にマージョリー・シャエヴィッツ (Marjorie Shaevitz) が同名著作で提出した概念であることは間違いない。それは、魅力的な女性、家庭的な母、政治的なフェミニストの全てでなければならないという強迫観念である。社会が女性に対してスーパーウーマンとなることを求めた背後にあったものは、福祉国家の解体と平行に起こった新自由主義の進展であり、それはセーフティーネットなきサヴァイヴァル状況と理解され、新たにマーケットに放り込まれた女性たちは、文化の領域で主体として代表／表象されるようになる (三浦 2013b)。

合衆国における新自由主義は、『テハヌー』刊行6年前の1984年、レーガノミクスにより始まった。『テハヌー』でのテハヌーは6歳という設定で、新自由主義の開始とその誕生が奇しくも同年である。セーフティーネットなき社会で、テハヌーは、近親者によって虐待され、レイプされ、火で焼かれ、瀕死の状況で、たまたま偶然に

もテナーに救助され保護される。彼女の右半身は焼けただれ、右目は開かず、右手は指が焼け落ちて鉤爪のようになっている。人間の愚行と暴力を身体に刻んだ6歳のこの少女こそが、物語を導く存在となる。物語の結末部、力を失ったゲドとテナーが悪しき魔法使いの手に落ちようとするまさにその瞬間、テハヌーは最古の竜カレシンを呼び寄せ、竜は敵を炎で焼き尽くす。カレシンはテハヌーに対して「我が娘」と呼びかけ、テハヌーは竜の言葉でこう語りかける。「ねえもう行こう? (中略) 他の者たちがいる所へ、もう一つの風に乗ってさ? (“Shall we go there now? .....“Where the others are, on the other wind?”) (Le Guin 2018: 544)。カレシンがゲドとテナーは連れていけないと答えると、テハヌーは留まることを選択する。そうして三人は家族として地上で末永く幸せに暮らす——はずだった。

“第一の三部作”をフェミニズムにより改訂し、〈アースシー〉全体を締めくくるものとして書かれた『テハヌー』は、結果として“第二の三部作”の始まりを告げるものとなった。現実世界で動いた〈現在 (now)〉がル＝グウィンに再度ペンを握らせ、テハヌーの物語を更新することを求めたのだ。次項ではアースシーの物語世界を離れ、現実世界の1990年代を概観する。

Ⅲ. 「アースシーを改訂する」——第二波フェミニズムとバックラッシュ  
誰もが『テハヌー』によってアースシーは完結したと信じていた1992年、ル＝グウィンは「アースシーを改訂する」(“Earthsea Revisioned”) と題した講演を行

い、翌年にはそれを活字化し雑誌へと掲載した。この講演録は、ル＝グウィンによるフェミニズムへの感謝そしてフェミニストとして創作していくことの力強い宣言であり、何より『テハヌー』に対して寄せられた批判への著者からの応答である。ル＝グウィンは〈アースシー〉のポリティクスについてこう語る。

批判者たちは言う、「何たる恥だ、ル＝グウィンは彼女が創造した喜びに溢れた世界を政治化した。アースシーはもう二度と以前のようににはなるまい」。そのとおりだ。しかし、政治は最初からずっとアースシーにあったではないか。英雄譚に隠れた政治が、魔法が解かれるまで自分がその影響下にあったと知ることのできない政治が。(中略)アースシーでの全てのモラルは現実世界の重さを持っている。フェアリーランドのポリティクスこそ我々のものだ。(Le Guin 2018: 991)

この講演の「現在」は1992年であるが、1991年にはスーザン・ファルーディ(Susan Faludi)が第二波フェミニズム以降に起こった揺り戻し問題を『バックラッシュ』(Backlash)として出版、同年のピューリッツァー賞を受賞し、広範な論争を呼んでいた時だ。

小谷真理はル＝グウィン追悼論考「詩人の魂を秘めた幻視者」のなかで、いかに『テハヌー』が議論を巻き起こしたかを、そしてそれに対してル＝グウィンが毅然と反応したのかを書いている(小谷 2018)。バツ

クラッシュは、保守的な男性からのみ起こったのでも、アメリカだけで起こったのでもない。たとえば日本において、本講演録は清水真砂子の訳によって「ゲド戦記を“生き直す”」と題され雑誌『へるめす』45号に載ってはいるが、書籍の形では読めない。日本における『ゲド戦記』全体の単独訳者である清水は自著でこの講演録について、「第四巻をこんなにやせ細ったものとして読んでほしくなかった」(清水 2006: 32)と、単行本未収録であることを誇らしげに語っている。また作家の上橋菜穂子と荻原規子は、追悼号の雑誌の対談企画において『テハヌー』発表時を振り返り、そのフェミニズム要素の前景化を主な理由として「『これは受け入れられない』という気持ちが強かった(上橋)」、「容認できなかった(荻原)」と述べている(上橋・荻原 2018: 34)。『テハヌー』で展開されるフェミニズムと、作者によるフェミニスト創作宣言は、ファンタジー小説世界の基準から考えればあまりにラディカルで、誰も当時その先があることなど想像できなかった。

『テハヌー』刊行翌年の1991年、ソヴィエト連邦が解体し長きにわたる冷戦体制が崩壊した後、資本主義こそが第一命題となり、グローバル化の波が世界中を覆った。グローバル資本主義と新自由主義とポストフェミニズム状況はどれも切り離すことができない。アメリカでは1992年にロサンゼルス暴動が起こるなど、ジェンダーだけではなく、人種、階級、経済問題とポスト冷戦の10年間、アメリカの既存の秩序は揺れ続けていた。先に引用した『アースシーの物語』の序文で「なんと愚かな作家なのだ

ろう！現在（*now*）は動くのだ」とル＝グウィンは述べていたが、その先を彼女はこう続けている。

『テハヌー』刊行から7、8年経った頃、私はアースシーを舞台にまた物語を書かないかと言われた。少しだけアースシーを覗いてみると、私がいなかった間に様々なことが起こっていた。そこに戻り何が現在（*now*）起こっているかを知る時が来た。（中略）アースシーについて書き始めた時から私は大分変わった、もちろん読者もそうだろう。時と共に全ては変わるが、私たちの変化は巨大で急速な倫理的そして精神的な変容だった。原理的なものは重荷となり、単純さは複雑さへと、カオスはエレガントなものへ、そして皆が真実であると信じ込んでいたことは、一部の人がかつてそう考えていただけのものになった。（Le Guin 2018: 557-9 斜体原文）

この序文をそのまま表すかのように、『テハヌー』以降のアースシー世界を描いた短編「ドラゴンフライ」は既存の4冊で築かれた価値観を壊す内容となった。『テハヌー』で展開されたジェンダー・ポリティクスがラディカル・フェミニズムであったとしたら、「ドラゴンフライ」そして『もう一つの風』のそれは、ラディカル・クィアである。

#### IV. 身体こそが重要だ——「ドラゴンフライ」、『ジェンダー・トラブル』

『テハヌー』出版の直後、ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』（*Gender Trouble*）が刊行された。イヴ・コゾフスキー・セジウィック（Eve Kosofsky Sedgwick）『クローゼットの認識論』（*Epistemology of the Closet*）も同じく1990年刊行で、この2冊を中心として合衆国では1990年にクィア・スタディーズが本格的に始動した。『ジェンダー・トラブル』はジェンダー・スタディーズを前進させたが、同時に多くの批判も呼び込んだ。「セックスは常にすでにジェンダーである」という命題で広く知られる彼女のジェンダー・パフォーマンスティヴィティーは、ジェンダーを構築する本質主義の言説を脱構築するものであった。言説が構築する／される場としての身体を指定するバトラーの理論は——ル＝グウィンのジェンダーSF小説がそうであったように——常に身体を巡るものであった。クィア理論の隆盛以前に、ル＝グウィンはすでに『闇の左手』（*The Left Hand of Darkness*, 1969）そして『所有せざる人々』（*The Dispossessed*, 1973）をはじめとする一連のジェンダーSF作品のなかでクィア／LGBTQの物語を書き続けてきた<sup>3</sup>。

「ドラゴンフライ」は『アースシーの物語』収録作品の中で最も早く1998年に著され雑誌発表された短編であり、物語の舞台は『テハヌー』の結末から8年後——現

3 ル＝グウィンの作品群とバトラーの理論との親和性を指摘する研究者は多い。一例として（小谷 2018; Rashley 2007）を参照せよ。

実世界と同じ歳月が流れている——となっている。物語の概要を記す前に、〈アースシー〉の世界における前提をいくつか確認しておきたい。

- ① 権威ある魔法使いになれるのは男性のみで、女性は魔女になれこそすれ、ローク魔法学院には足を踏み入れることさえ許されない。
- ② すべての生物はそれぞれ固有の〈真の名〉を持ち、魔法使いはそれを唱えることで対象を意のままに操ることができる。
- ③ かつて竜と人は一つであったが、両者は協議し合意の上で東と西へ分かれることとなり、以降はたがいに無関心で暮らす約束をした。

ドラゴンフライという名の少女は、町外れに住む魔女に、あなたには何か隠された力があると言われ、〈真の名〉がアイリアンであることを明かされるも、それだけでない何かがまだ秘められており、ローク魔法学院に赴けばわかると告げられる。自分が何者であるかを知りたい欲求に駆られた彼女は、男性装をしてロークへの侵入を図る。男性特権である知にアクセスするためジェンダー領域を越えようとするドラゴンフライは、知識よりも「女」として生きることを望みオギオンの元を去った若き日のテナーと正反対の設定が付与されている。

ロークの入り口に立つ守りの長は、すぐにドラゴンフライの正体が女性であることを見破る。彼女は観念しアイリアンと真の名を明かすが、守りの長は「他にも真の名

を持っているのではないか」と訝り、①の掟を破って彼女を学院に入れる。ロークはゲドが去った後、秩序が未だ回復せず、死の世界に魅入られた呼び出しの長がロビー活動を行い大賢人の座につこうと画策していた。様式の長アズバーの元で、ドラゴンフライは、自分がロークにきた真の理由に気づき始める。

「あなた〔ドラゴンフライ〕がなぜここに来たのかはわからない。しかし、偶然ではないようだ。呼び出しの長もそれはわかっている」

「私は、あの人〔呼び出しの長〕を破滅させるために来たのかもしれない」アズバーは彼女の顔を見たが、何も言わなかった。

「もしかして、ロークを破壊するために来たのかもしれない」

アズバーの青白い目が燃えた、「やってみなさい！」(Le Guin 2018: 729-30)

ドラゴンフライの使命は、まさにロークの破壊にあった。物語結部、呼び出しの長が、ドラゴンフライの真の名〈アイリアン〉を唱えて彼女を操ろうとしたとき、「私はアイリアンであるだけでない！(I am not only Irian!)」(Le Guin 2018: 736)と叫んだドラゴンフライは、その身体を竜へと変え、相手を火で焼き尽くした。彼女は竜の言葉で「西の先へ行く」と言うと、飛び去った。ここにおいて上記②③は一度に崩れ去る。

〈真の名〉は、「存在の奥底には変わる事のない／変えることのできない本質が

ある」という基盤主義とも、自らが拠って立つ本当の自分＝アイデンティとも解釈することができる。バトラーは『触発する言葉』(Excitable Speech, 1997)の序章において、ルイ・アルチュセール(Louis Althusser)の〈呼びかけ〉とミシェル・フーコー(Michel Foucault)の言説概念が記述される場としての身体という理論を提出するが、「アイリアン」という〈真の名〉による敵からの呼びかけを、「竜の言語」で跳ね除けた彼女は人間の身体を脱ぎ去ることで自由になる。『ジェンダー・トラブル』最終章「パロディから政治へ」の最終パラグラフを引用しよう。

基盤主義の逆説は、それが表象／代表し解放したいと願っている、まさにその「主体」を前提とし、固定化し、束縛しているということである。したがってここでの課題は、あらゆる新しい可能性を可能性として愛でることではなく、すでに文化の領域のなかに存在しているけれども、文化的に理解不能とか、存在不能とされていた可能性を、記述しなおしていくことである。

(Butler 1990=2018: 260)

ル＝グウィンの最も著名なエッセイの一つに「なぜアメリカ人は竜を恐れるのか」(“Why Are Americans Afraid of Dragons”)というものがある。この問いに対し「想像す

ることを恐れるから」と彼女はシンプルに答えている(Le Guin 1989a)。上記引用でバトラーが述べる「すでに文化の領域の中に存在し(中略)理解不能とか、存在不能」と呼ばれる存在は、ル＝グウィンの述べる竜に合致し、“第一の三部作”の基本設定を大きく覆すドラゴンフライの竜への転身は、「可能性を記述しなおしていく」ことに他ならない。本当の自分とは何かを探そうとした少女は、人間世界から離れ、竜となった。もはや彼女は〈真の名〉を必要とせず、ゆえに、それに縛られることがない。

バトラーそしてクィア理論はル＝グウィン作品と親和性があることは間違いがない<sup>4</sup>。それでは、バトラーやクィア理論に加えられた批判も同様にまたル＝グウィンへの批判となるのだろうか？最終第6巻の読解に進む前に、1990年代に行われた〈承認か再分配か〉の議論を検証したい。結論を先取りすれば、『もう一つの風』は、この議論に象徴される1990年代の言説を取り込み、それを乗り越える一つの方途を示唆している。

## V. 承認か再分配か——『中断された正義』、「単に文化的な」

バトラーの理論はあまりにラディカルであると、多くの批判や反論が寄せられた<sup>5</sup>。最も理論的応戦が繰り返されたものとして、1997年のフレイザー『中断された正義』

4 織田まゆみは著書『ゲド戦記研究』のなかで、セジウィック『クローゼットの認識論』を援用し、ゲドやレバンネンを分析の対象にあげ、“第二の三部作”におけるホモ・ソーシャルな円環を指摘している(織田 2011: 107-8)。

5 フレイザー以外の論者による1990年代にバトラーに対して寄せられた反論については(三浦 2013a)

(*Justice Interruptus*)がある。マルクス主義フェミニストであるフレイザーは、冷戦体制の終焉によって「ソヴィエト連邦の崩壊＝社会主義の失敗」といった言説が資本主義体制によって流布され膾炙し、“富の再分配という正義”を誰も顧みなくなると90年代の初頭から主張していた(Fraser and Nicholson 1993)が、『中断された正義』において1990年代の左翼知識人からもそれを補強し結果として支持する主張がなされていると指摘した。フレイザーの批判は、当時の多様性を主張する<アイデンティティ・ポリティクス>と名指された政治へと向けられた。フレイザーの批判の要諦は、それぞれ各集団が自身の現在置かれている不利益を改善するため、社会／体制から承認(recognition)を得ることが第一目標となっており、それは大きな社会を措定しえず<正義＝再分配>を抹消しようとする“単に文化的な”マイクロポリティクスにすぎない、というものである。

フレイザーがアイデンティティ・ポリティクスを批判するその先にはクィア・スタディーズがあり、バトラーはこれに正面から応答し、「単に文化的な」(“Merely Cultural”)を発表する。バトラーはフレイザーが文化と政治を分離するその態度こそが政治的分断を招く新保守主義的なものであると厳しく糾弾、彼女の理論が「身体＝物質」を中心に論じるのは、周縁に追いやられた身体こそが「物質としての資本(主義)」のなかで問題となっているからで、クィア・スタディーズのアクティ

ヴィズムは資本主義を変革する契機をすでに有していると反論した。フレイザーもすぐさま「ヘテロセクシズム、誤認、そして資本主義——ジュディス・バトラーへの応答」(“Heterosexism, Misrecognition and Capitalism: A Response to Judith Butler”) で「現代の資本主義はヘテロセクシズムを必要としていない」(Fraser 1998=1999: 248)と再反論する。「現状の資本主義を脱構築」しようとするバトラーに対して、フレイザーはあくまで「資本主義の生産体制それ自体の変革」が必要であると主張するが、一見するとバトラーの反論と噛み合っておらず歯切れが悪い印象を与える。しかし、菊地夏野はこの論争を現在から振り返る必要性を主張する。

この論争から十数年を経過して、あらためてフレイザーの批判を振り返ると、その意義がより危機感をもって蘇って来るようだ。というのは、この二十年間ほどの新自由主義の進展による経済的抑圧の深化を見ると、フレイザーの危惧が実現したように思われるからである。(菊地 2015: 69)

この論争の後、フレイザーそしてバトラーも新自由主義への批判へと向かうが、1997、1998年当時、両論文には一言も新自由主義(Neoliberalism)という語が使用されていないことに留意する必要がある。新自由主義下における資本収奪の暴力性が格差社会として表出した現在、フレイザーの

---

を参照せよ。

この批判はより重要性を帯びる。

ル＝グウィンは2017年のインタビューで、自身は学者ではないとエクスキューズし、「クィア理論等について聞かれてもよく知らない」(Le Guin 2017a: 6)と述べている。本稿は、ル＝グウィンがバトラーやフレイザーを読んでいた／意識していた、と主張するものでは一切ない。そうではなく、『テハヌー』を現在から読み返した時すでにポストフェミニズムのテーマが書き込まれていたのと同様に、『もう一つの風』にはバトラー／フレイザーの問題系が常にすでに書き込まれていたことを論証したい。ではなぜル＝グウィンのテキストにその痕跡が刻まれた／現れるのか、その答えはシンプルである。ル＝グウィンはフェミニストとしてだけでなく、冷戦体制下から一貫して資本主義を批判し、文学マーケットにおける市場主義／ファンタジーの商品化に抗い続ける反資本主義の闘士でもあったからだ。

晩年のル＝グウィンがグーグルとアマゾンに公然と批判し、反資本主義の先頭に立ち続けたことは記憶に新しいが、そのような巨大グローバル企業が市場を独占する以前から、先に引用した『アースシーの物語』に寄せられた序文で、「急速な変化」として1990年代のグローバル資本主義を厳しく糾弾している。バトラーとフレイザーが論争を開始する前から、ル＝グウィンはフェミニズムと資本主義を問題とし続けた。だからこそ彼女のテキストは、ジェンダーと経済の問題、つまり1990年代にジェンダー・スタディーズが突き当たった問題が書き込まれる場所となる。1990年代クィア

理論の達成とそれが生んだ問題点、冷戦体制の崩壊とグローバルに拡大し続ける資本主義、『もう一つの風』は、そのような現実世界を映し鏡としながらも、アースシー世界というフィクションを通してしか提示され得ない〈現在 (now)〉への物語作者ル＝グウィンからの応答である。

## VI. 『もう一つの風』—— 1990年代を考える

太古の昔、人間と竜は一つだった。竜は精神を求め西へ、人間は物質を求め東に住み、お互いに干渉せず暮らす契約を交わした。『テハヌー』でアースシー世界には平和が訪れ、生と死の石垣は完全に封じられたはずだった。それから8年後、「ドラゴンフライ」で乱れ始めた調和は、アースシー世界の8年後（現実の世界では3年後）『もう一つの風』で完全に狂ってしまっている。竜は怒り狂って人間世界を襲い、生と死をわける石垣を乗り越え死者に取り憑かれる生者が現れる。世界の籬が外れたアースシー世界を平定せんと立ち回るのは、『最果ての岸』でゲドと共に旅をした若き王レバンネンである。アースシー世界の中央に位置する首都ハブナーの王レバンネンを悩ますのは、竜だけではない。テナーの出身地である東の海にあるカルガド国から、王が娘セセラクを調停のために派遣する。ハブナーと友好的な関係になく、文化も言語も異なるカルガドの王が望むのは、娘セセラクとレバンネン王との結婚である。西からは荒れ狂う竜が攻めてきて、東からは人間が政略結婚を迫り、レバンネンを悩ませる。レバンネンはゲドに助力を求めるも、

すでにゲドは隠居をし、代わりにテナーとテハヌーが彼と行動を共にする。西の竜との調停で活躍するのがテハヌー、東のカルガドとの交渉で立ち回るのがテナーだ。まずはカルガドとの交渉に焦点を当てたい。

## 1. 女たちの連帯

レバンネンはテナーを全面的に信頼し敬意を持って接するが、それとは対照的にセセラクに対し嫌悪とも言える感情を抱く。そのレバンネンとセセラクを繋げるのがテナーである。東方の国カルガドからやってきた若き白い女セセラクは、自分の意志を外に出すことが出来ず、父親の政略結婚の駒とされるも、その相手に嫌われてしまい、ベールの下で怯えることしかできない。出自と肌の色を同じくするテナーは、セセラクに自らの過去を見る。テナーがフェミニズムと社会の変遷の中で揺れ動くポストフェミニストであり、テハヌーが新自由主義のサヴァイヴァル状況に投げ込まれた娘であるならば、セセラクが代表／表象するのは、近代国家と違って未だ強い父権制が支配する宗教的な社会で生きる女性である。

小説の中で、カルガド王国はハブナーと全く違う宗教観・死生観を持っていることが強調される。ハブナーを1990年代の世界の中心＝アメリカと仮定して見ると、ハブナーと友好的な国交を持たず、宗教も死生観も異なる父権制の強い国でベールを被るセセラクに、イスラーム文化圏で生きる女性を重ねるのはそこまでの外れではない。そしてテナーは——作者は——そのような女性を決して排除しない。テナーは母

となり教師となりセセラクを導く。セセラクは異国の言語を習得し、ベールの持つ意味を理解し、それを捨て去るのではなく、人前で脱ぐことは決して恥ではないのだと学び、レバンネンの強さと孤独を知る。セセラクが自らの旧習を打ち破る時、レバンネンもまた自身の中の偏見に気づき、二人は最終的に婚姻の契を交わす。『墓所』において、解放されたテナーと共にゲドは生きることができなかった。しかし、レバンネンとセセラクは違う。『もう一つの風』で展開されるフェミニズムとは、それまでル＝グウィンが書くことをしなかった、<もう一つのフェミニズム>の可能性だ。

肌の色、文明、宗教は違えども、異性愛の婚姻による幸せな交渉の成功は、保守的なジェンダー価値観への退行だと理解されるかもしれない。しかし、この異性愛の設定があるからこそ、『もう一つの風』の二人の竜の姉妹、ドラゴンフライとテハヌーのラディカルさが際立つのだ。

## 2. 竜の怒り

1990年、ベルリンの壁は壊れたばかりで、ソ連邦は解体する寸前であり、世界はアメリカ型の民主主義によって一つになるかのように思えた、しかし、実際はそうならなかった。1991年に湾岸戦争が勃発、中東は戦地となり、旧共産圏は紛争が続発、アメリカは民主主義を表向きに資本主義をグローバルに伝播し、世界の経済を支配していった。『もう一つの風』で竜が怒り狂い人間を襲う理由は、一部の強欲な人間が竜との契約を破り、分割線を超え竜の土地を我が物にせんと石垣を築いたことが原因

であると判明する。ル＝グウィンは、このようにして『テハヌー』からの10年——つまり1990年代——を「動いた現在 (*now*)」としてアースシー世界に再現してみせた。

タイトルである「もう一つの風 (“The Other Wind”）」という語句の初出は『テハヌー』で魔女が歌う「竜の歌」の一節である。魔女は幼きテハヌーに「我々人間の中には、かつて自分たちが竜と一つだったことを知るものがいて、竜の側にもそれを知るものがある (中略) 竜と人が別れる前に、世界の反対側に飛び去った者たちは、今も平和に暮らしている」と語った (Le Guin 2018: 406)。竜であり人間である存在こそが、テハヌーであり、ドラゴンフライだ。テハヌーはドラゴンフライを呼び出し、宮殿で会談を開く。竜であり人であるこの姉妹の先導と調停によって、一行は竜の土地へ赴いて石垣を壊すと、生と死の境は閉じられ、竜と人間の分割もまた再び完全なものとなる。

物語の結末部で、テハヌーは焼けただけだ右半身の人間の身体を脱ぎ去り、竜になって〈もう一つの風〉に乗り、竜の世界でも人の世界でもない世界の外へと、ドラゴンフライと共に飛び立つ。家に戻ったテナーが、ゲドにそのことを告げると、「私たちは世界を一つにするため、世界を壊した (“We broke the world to make it whole”）」そうゲドは語り、「もしあの子が来るとしたら、あそこからだろうな (“If she comes, she'll come from there”）」(両引用ともに Le Guin 2018: 891) と窓の外を指差す。

憎しみで分断された世界が、分割されることによって終わるこの終幕を、一体どの

ように理解すればよいのだろうか、それは冷戦世界を懐かしむノスタルジーにすぎないのだろうか？「私たちは世界を一つにするため、世界を壊した (“We broke the world to make it whole”）」というゲドの台詞は、あまりにも多義的だ。この単純過去時制「We broke the world 私たちは世界を壊した」を『テハヌー』刊行時の1990年に戻す時、それは前述したようなグローバル資本主義の暴力が世界を破壊したととれるし、同時代の2001年ととれば、暴力的な現在世界を再度調停するために、『もう一つの風』という物語が必要であったと解釈できる。しかし、娘テハヌーが竜となって飛び去ったことを受けての台詞であることを理解するならば、むしろ重要なのは不定詞目的格「to」以下の「to make it whole 世界を全きものにするため」であり、世界の破壊と創生を巡る、〈アースシー〉全6巻の物語それ自体を総括する言葉であるかのように響く。

しかしなぜ、〈アースシー〉の物語の最後に、テハヌーそしてドラゴンフライの姉妹、竜というクィアな身体を持つ二人の竜人は、もう一つの風に乗り飛び去ったのだろうか？

### 3. ル＝グウィンにとっての1990年代とは何だったのか

新自由主義を本格的に開始したのは英国サッチャー政権であるが、その時のスローガンは「他に道はない (“There is no other way”）」だった。冷戦後のグローバル資本主義は、「他に代替はない (“There is no alternative”）」と叫び、英国ニュー・レイバーと合衆国ニュー・デモクラットは「第

三の道 (“The third way”)」を掲げたが、それこそが1990年型の新自由主義政策に他ならなかった。「資本主義の終わりを想像するよりも、世界の終わりを想像するほうが容易い」(Jameson 1994: xii) と、資本主義の外部を想像することが困難となった時代が、1990年代の言説空間だった。

ル＝グウィンはその人生の最後まで、冷戦体制崩壊以降の世界秩序を考え続けた人だった。彼女はこまめに日記をつけて自らの公式HPにアップした。全130エントリーあるそれは、現在も公開され閲覧が可能だ。2016年に持病の心雑音を悪化させ入院してからは、公開頻度が激減した日記の、その最後の更新日時は2017年9月25日、タイトルは「1991年ソヴィエト連邦が解体した時に書いた詩 “Poem Written in 1991 When the Soviet Union Was Disintegrating”」であった。なぜこの詩が突如としてアップされたのか、なぜ生涯最後となったブログ投稿にこの詩が選ばれたのか、サイト上に何一つエクスキューズはない。

その長い詩は二部に分かれていて、前半部は、異言語であるスペイン語を自身が学ぶ理由と自身がフィクションを書く理由を記した内容となっており、創作と学びに対する愛と敬意が綴られている。つづく後半部で、ル＝グウィンは1919年のロシア革命の理念を称賛するも、それ以降の現実を、男たちによる支配、「何も生み出さなかった70年 (“Seventy years for nothing”）」であったと、革命の夢が裏切られたことを厳しく非難する。以下、最後のスタンザを引用する。

Once I sang freedom, freedom,

かつて私は自由、自由と歌った、  
sweet as a mockingbird.

モッキングバードのように甘く。

But I have learned Real Politics.

けれど私は本物の政治を学んだ。

No freedom for our children

我らの子供達に自由はない

in the world of the sayso.

利己的な意見がまかりとおる世界  
では。

Only the listening.

ただ耳を澄ますことのみ。

The silence all around the sayso.

利己的な意見の周りにある全ての  
静寂。

The never stopping listening.

終わることのない聴きとり。

So I will listen

ゆえに私は耳を傾ける

to women and our children

女性たちと我らの子供たち

and powerless men,

そして力のない男たち、

my people. And I will honor only

私の人々。そして私は讃えるだろう

my people, the powerless.

ただ、力のない、私の人々を。(Le  
Guin 2017b)

強者たちは、権力ある者たちは、他に道がないのだと、もはや外部はないのだと声高に叫んだ。そんな1990年代の終りに、テハヌーとドラゴンフライの二(竜)人はくもう一つの風 (the other wind) >があるこ

とを示し羽ばたいた。力と権威を喪失した男であるゲドは、テハヌーが回帰する場所として、窓の外を、ここではない外部を想像する。

ル＝グウィンは逝去の前年 2017 年に掌編“Firelight”を書き遺し、「自分が死ぬまで刊行しないように」と指示した<sup>6</sup>。その内容

は、老衰したゲドが人生最後の冒険として〈もう一つの風〉に乗ろうとするものであった。『もう一つの風』は、ル＝グウィンによる 1990 年代の批評であり、フィクションとして提示された現実世界へのオルタナティブであり夢であって、彼女は死ぬまでそのビジョンを手放さなかった。

## 付記

本稿は 2018 年 12 月 1 日に英国ケンブリッジ大学に於いて開催された International Gender Conference: “Gender (Mis) Representation” 内での口頭発表“Gender Trouble in Earthsea: Reading the Last Two Books of Ursula K. Le Guin’s *Earthsea* through the Gender Politics in the ‘90s” を大幅に修正／加筆したものである。

## 引用文献

- 青木耕平, 2019, 「竜の風と共に去りぬ——ル＝グウィン遺稿『ゲド戦記』真の最終章“Firelight”を読む」, 『現代アメリカ文学ポップコーン大盛』, 書肆侃侃房による公式運営 HP, (2019年4月25日取得, [https://note.mu/kankanbou\\_e/n/na3726e12b8d5](https://note.mu/kankanbou_e/n/na3726e12b8d5)).
- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York, Routledge. (竹村和子訳, 2018, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社).
- . 1993, *Bodies that Matter: On the Discursive Limits of “Sex,”* New York, Routledge.
- . 1997, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, New York, Routledge.
- . 1998, “Merely Cultural,” *New Left Review* 227 (大脇美智子訳, 1999, 「単に文化的な」『批評空間』23号 (太田出版): pp. 227-40)
- Clarke, Amy M, 2010, *Ursula K Le Guin’s Journey to Post-Feminism*, North Carolina, McFarlnad.
- Faludi, Susan, 1991, *Backlash: The Undeclared War Against American Women*, New York, Crown.
- Fraser, Nancy, 1997, *Justice Interruptus: Critical Reflections on the “Postsocialist” Condition*, New York, Routledge.
- . 1998, “Heterosexism, Misrecognition and Capitalism: A Response to Judith Butler,” *New Left Review* 228 (大脇美智子訳, 「ヘテロセクシズム、誤認、そして資本主義——ジュディス・バトラーへの応答」『批評空間』23号 (太田出版): pp. 241-53).
- Fraser, Nancy and Linda Nicholson, 1993, “Social Criticism without Philosophy,” In Thomas Docherty ed. *Postmodernism: A Reader*, Harvest Wheatsheaf.
- Fraser, Nancy and Axel Honneth, 2003, *Redistribution or Recognition?: A Political-Philosophical Exchange*.

6 死後出版となった“Firelight”の刊行経緯については、アースシー著作権を管理しているル＝グウィンの息子 Theodore Downes-Le Guin 氏に直接メールインタビューし回答を得た。氏の許諾を得て拙稿 (青木 2019) にメールを一部転載している。

- London, Verso.
- Jameson, Fredric, 1994, *The Seeds of Time*, Columbia, Columbia University Press.
- 菊地夏野, 2015, 「ポストフェミニズムと日本社会——女子力・婚活・男女共同参画」越智博美・河野真太郎編『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」——格差、文化、イスラーム』彩流社。
- . 2019, 『日本のポストフェミニズム——「女子力」とネオリベラリズム』大月書店。
- 河野真太郎, 2016, 『戦う姫、働く少女』堀之内出版。
- 小谷真理, 2018, 「詩人の魂を秘めた幻視者」『ユリイカ』2018年5月号(青土社): pp. 56-66.
- 清水真砂子, 1993, 「解説(『ゲド戦記』を生き直す)」『へるめす』45号(岩波書店): pp. 157-8.
- . 2006, 『『ゲド戦記』の世界』岩波書店。
- 三浦玲一, 2013a, 「労働者のアイデンティティ・ポリティクスにむけて——90年代を考える」『言語社会』7号(一橋大学紀要): pp. 123-37.
- . 2013b, 「ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの可能性——『プリキュア』、『タイタニック』、『AKB48』」三浦玲一・早坂静編『ジェンダーと「自由」——理論、リベラリズム、クィア』彩流社。
- Le Guin, Ursula, K, 1969, *The Left Hand of Darkness*, New York, Ace Books.
- . 1974, *The Dispossessed*, New York, Harper and Row.
- . 1989a, *The Language of the Night*, New York, Putnam.
- . 1989b, *Dancing at the Edge of the World*, New York, Grove Press.
- . 2009, *Cheek by Jowl*, Seattle, Aqueduct Press.
- . 2017a, *Conversations on Writing*, Oregon, The House Books.
- . 2017b, “Poem Written in 1991 When the Soviet Union Was Disintegrating,” *Ursula K. Le Guin. com* (2019年4月26日取得 <http://www.ursulaklequin.com/Blog2017.html#New>)
- . 2018, *The Books of Earthsea: The Complete Illustrated Edition*, New York, Saga Press.
- . 2019, *The Last Interview*, London, Melville House.
- 織田まゆみ, 2011, 『ゲド戦記研究』原書房。
- Rashley, Lisa Hammond, “Revisioning Gender: Inventing Women in Ursula K. Le Guin’s Nonfiction,” *Biography*, 30(1), Winter 2007: pp. 22-47.
- Sedgwick, Eve Kosofsky, 1990, *Epistemology of the Closet*, Berkeley, University of California Press.
- Shaevitz, Marjorie, 1984, *The Superwoman Syndrome*, New York, Random House Inc.
- Trites, Roberta Seelinger, 1997, *Waking Sleeping Beauty*, Iowa, University of Iowa Press.
- 上橋菜穂子・荻原規子, 2018, 「『ゲド戦記』とわたしたち、あるいはファンタジーを継ぐということ」, 『ユリイカ』(青土社) 2018年5月号: pp. 32-45.

(掲載決定日: 2019年5月29日)

Abstract

Gender Politics in Ursula K. Le Guin’s Second *Earthsea* Trilogy: Postfeminism, Queer Theory, and Anti–Global Capitalism

Kohei Aoki

This paper situates Ursula K. Le Guin’s second *Earthsea* trilogy in the context of 1990s gender politics. After the second wave of feminism, Le Guin decided to revise the first *Earthsea* trilogy, which had been a male-dominant story. In 1990, she published a fourth *Earthsea* book, titled *Tehanu*, which has a stronger feminist narrative than the previous three books and discusses the postfeminist situation. In the same month *Tehanu* was published, Judith Butler released her book *Gender Trouble*, which undermined the cornerstone of gender essentialism. Queer theory seems to be a good fit to analyze “Dragonfly,” the sequel to *Tehanu*. However, in the 1990s, Nancy Fraser, in her criticism of identity politics, argued that those who affirm identity politics just want their own recognition and do not care about redistribution. In the era of neoliberalism, the choice between “recognition or redistribution” was difficult to make. Seemingly intervening in such a situation, *The Other Wind* was suddenly published. These works presented not only the strategy of 1990s gender politics but also a critique of global capitalism, which means that both Butler’s achievement and Fraser’s question are written in *The Other Wind*.

Keywords

Ursula K. Le Guin, *Earthsea*, Postfeminism, Queer Theory, Neoliberalism.